

渡部昇一著『人間らしさ』の構造」講談社学術文庫、講談社 1977年5月10日刊を読む

「ここに1個のどんぐりがあるとす。そのどんぐりにとっての生きがい、つまり、本望は何であろうか。それは、ころころ転がって池に落ち、そこでどじょうに見守られながら腐ってしまうことではあるまい。また石の上に落ちて干上がってしまうことでも、鳥か何かに食べられてしまうことでもあるまい。どんぐりの生きがいは、しかるべき豊潤(ほうじゅん)な地面に落ちて、亭々(ていてい)たる檜の木になることであろう。

どんぐりを割っていくら顕微鏡で調べてみても、その中に檜の木の原型は見えない。しかし、しかるべき条件に置かれれば、やがて芽が出て、何十年後には大きな檜の木になるのである。つまり、どんぐりの中には檜の木になる能力が潜在しているのである。」

P46

<コメント>

開倫塾が、メスの蜜蜂にとっての「ロイヤルゼリー」、どんぐりにとっての「しかるべき豊潤(ほうじゅん)な地面」「しかるべき条件」となるにはどうしたらよいか、考えたい。

2018年10月12日(金) 2時07分